

## 鬼を身近に感じられる本

もうすぐ節分です。今回は節分の豆まきにちなんで、鬼を身近に感じられる本を紹介します。

1冊目は、山崎敬子/著『都道府県別につぼんオニ図鑑』です。

みなさん「鬼」といえばどんな姿を思い浮かべますか？赤い顔に二本の角、トラ柄のパンツにトゲトゲの金棒を持っている姿をイメージする方が多いのではないのでしょうか。この本は、かわいい鬼から怖〜い鬼まで日本全国のいろいろな鬼が紹介されているユニークなオニ図鑑です。「鬼」と一言でいっても、豊作を願う獅子舞や「泣く子はいねがー！」でお馴染みのナマハゲなど、その姿は様々です。

さて、鬼ヶ島が有名な香川県では一体どんな鬼が紹介されているのでしょうか。

2冊目は、野村たかあき/作『おばあちゃんのえほうまき』です。

節分の日、きりちゃんは学校がおわると急いでおうちに帰ります。今日は、おばあちゃんと一緒に七つの具が入った縁起のいい太巻き寿司を作る日です。ところが帰ってきたきりちゃんは気になることがいっぱい。

“どうして玄関にイワシの頭とヒイラギの葉っぱを飾るの？”

“どうして恵方巻にはたくさんの具が入っているの？”

おばあちゃんにいろいろなことを教わるきりちゃんと同じ目線になって楽しむことができる絵本です。

3冊目は、大塚己愛/著『鬼憑き十兵衛』です。

父の仇を討つべく復讐に燃える少年・十兵衛。ある日、仇の一味に襲われ死に瀕した十兵衛を助けたのは、妖しい気配をまとう黒い影。その正体は人を食らう鬼で、形容しがたいほど美しい青年の姿をしていました。大悲と名乗るこの鬼は、復讐の手助けをするかわりに、十兵衛が死ぬまで取り憑くと仰いだします。どこか人懐っこい鬼と、戦うことしか知らない少年の旅の行く末やいかに。

デビュー作とは思えない圧倒的筆致で綴られた本作は、ファンタジー要素も含んでいるので時代小説初心者でも楽しめる一冊です。

図書館にはこの他にも、いろいろな鬼が登場する本がたくさんあります。ぜひ図書館にお立ち寄りください。